



てきすとぽい杯

VOL

6



<http://text-poi.net/>

目次

てきすとぼい杯について

てきすとぼい杯について

第6回 募集要項

第6回 審査結果

入賞作品紹介

《大賞》

「ありし日の終わりを作ること/ソーシャルキル」 犬子蓮木 獲得☆ 4.231

《入賞》

「冷やかし」 志菜 獲得☆ 4.143

「恋する乙女はどこにでもいる」 永坂暖日 獲得☆ 4.077

「A・I・応答せよ」 碧 獲得☆ 4.000

〈候補作品〉 ※得票順

〈緩応子賞〉

「緩慢に反応しない粒子」 Wheelie 獲得☆ 3.917

「10%」 しゃん 獲得☆ 3.857

〈高濃度文体賞〉

「眩暈の果てに」 工藤伸一@ワサラー団 獲得☆ 3.786

「さよなら」 丁史ウイナ 獲得☆ 3.727

「緩やかな歩み、応じる心」 栗田柚香 獲得☆ 3.600

「よるごはん」 茶屋 獲得☆ 3.500

「ユルミナン」 雨森 獲得☆ 3.462

〈二億で賞〉

「緩めの生クリームがお好き」 豆ヒヨコ 獲得☆ 3.417

〈番外作品〉 ※投稿順

「世界中の誰よりもっと」 ひやとい 獲得☆ 3.200 （制限時間外に執筆）

〈同じお題を用いた作品〉

[同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介](#)

終わりに

[終わりに](#)

[てきすとぼい広告](#)

奥付



「てきすとぽい」とは

URL : <http://text-poi.net/>

Twitter : <http://twitter.com/textpoi>

てきすとぽいは、2012 年 2 月より製作中の、競作・共作サイトです。

無計画書房に集う WEB 作家の有志で開発を進めております。

先日ようやく、投稿・投票・感想・チャットなど最低限の機能が稼働いたしまして、2013 年 1 月より てきすとぽい主催の競作イベント「てきすとぽい杯」を開始いたしました。



「てきすとぽい杯」とは

神様は七日間で世界を創造した。

僕らは一時間で物語を想造する。

てきすとぽい杯は、制限時間 1 時間 + 推敲 15 分で、お題に沿った小説を競作するイベントです。

競作で作品が集まった後は、☆投票による審査、感想コメント、チャット会での意見交換や交流がセットになった、全体としては約一週間ほどのイベントになります。

第 6 回てきすとぽい杯

会 場 : <http://text-poi.net/vote/21/>

お 題 : 漢字三題「緩、応、子」

これらの文字を、タイトルまたは本文で使用してください。

投稿期間 : 2013 年 6 月 15 日 22:30 ~ 同日 23:45

審査期間 : 2013 年 6 月 16 日 0:00 ~ 2013 年 6 月 23 日 24:00

第 6 回には、初参加の 2 作家さんを含む、計 13 作品をお寄せいただきました。

また、ユーザー企画「勝手に連動 第 6 回ぽい杯スピノフ賞」が、漢字三題「陰、否、親」のお題で開催されました。

【投稿について】

投稿期間：

6月15日（土）22:30 ～ 同日 23:45

制限時間 1 時間の間に、お題に沿った小説を書いて投稿してください。

お題は、開始時間になりましたら、会場やてきすとばい Twitter にて発表いたします。

会場：<http://text-poi.net/vote/21/>

てきすとばい Twitter：<http://twitter.com/textpoi>

お題発表より 1 時間で執筆、その後 15 分で推敲&投稿してください。

締切は同日 23:45 頃になる予定です（お題発表時刻により、若干前後します）。

【審査について】

審査期間：

6月16日（日）0時 ～ 6月23日（日）24時

審査方法は☆5段階評価で、てきすとばいのアカウントをお持ちの方ならどなたでも投票できます。個々の作品に感想ページもございますので、作品を読んで感じたこと、☆投票では表現しきれない評価など、ありましたらなんでも、お気軽にご記入ください。

票の集計方法：

☆評価の平均で、最も多くの☆を獲得した作品を「大賞」、以降3作品前後を「入賞」といたします。

※時間外に投稿された作品、お題を満たしていない作品も、投票や感想は同じように行えます。

ただ、結果発表の際に、集計対象からは外させていただくことをご了承ください。

第6回審査結果

【審査結果】 ※得票順、敬称略

1位 ☆ 4.231

「ありし日の終わりを作ること/ソーシャルキル」 犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/21/2/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:14

2位 ☆ 4.143

「冷やかし」 志菜

<http://text-poi.net/vote/21/11/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:42

3位 ☆ 4.077

「恋する乙女はどこにでもいる」 永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/21/13/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:44

4位 ☆ 4.000

「A・I・応答せよ」 碧

<http://text-poi.net/vote/21/4/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:28

5位 ☆ 3.917

「緩慢に反応しない粒子」 Wheelie

<http://text-poi.net/vote/21/9/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:41

6位 ☆ 3.857

「10%」 しゃん

<http://text-poi.net/vote/21/6/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:38

7位 ☆ 3.786

「眩暈の果てに」 工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/21/12/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:42

8位 ☆ 3.727

「さよなら」 丁史ウイナ

<http://text-poi.net/vote/21/8/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:40

9位 ☆ 3.600

「緩やかな歩み、応じる心」 栗田柚香

<http://text-poi.net/vote/21/5/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:36

10位 ☆ 3.500

「よるごはん」 茶屋

<http://text-poi.net/vote/21/1/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:02

11位 ☆ 3.462

「ユルミナン」 雨森

<http://text-poi.net/vote/21/7/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:38 最終更新: 2013.06.15 23:43

12位 ☆ 3.417

「緩めの生クリームがお好き」 豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/21/10/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:42

(番外) ☆ 3.200

「世界中の誰よりもっと」 ひやとい

<http://text-poi.net/vote/21/3/>

投稿時刻: 2013.06.15 23:15

※ 獲得☆票の内訳につきましては、てきすとぼい杯の会場にてご確認ください。

会場 : <http://text-poi.net/vote/21/>

《大賞 1 作品》

獲得☆ 4.231

「ありし日の終わりを作ること/ソーシャルキル」

著：犬子蓮木

<http://text-poi.net/vote/21/2/>

気になる彼女を空気で殺す――。

中学でいじめを受ける少女と、彼女を死へ追いやろうとする人物。
そしてクラスメイトたちの反応……。最後に、たった一文ですべてが明かされる、
非常に洗練された仕掛けの短編小説です。大賞おめでとうございます！

《入賞 3 作品》

獲得☆ 4.143

「冷やかし」

著：志菜

<http://text-poi.net/vote/21/11/>

吉原、仲ノ町。ぶらぶらと廓を冷やかしつつ歩く惣太郎が、
ふと目を留めた、中見世の遊女。どこか寂しげな、その妓に総太郎は……。
短いながらも完成された、本格時代小説でした。

獲得☆ 4.077

「恋する乙女はどこにでもいる」

著：永坂暖日

<http://text-poi.net/vote/21/13/>

とある川の船着場で、船賃回収の仕事を任される、乙女。
女性ながらに力仕事も多いという、彼女の勤め先とは……。
出落ちに留まらない、一貫して突き抜けた明るさと愉快さが高い評価を獲得しました。

獲得☆ 4.000

「A・I・応答せよ」

著：碧

<http://text-poi.net/vote/21/4/>

やや旧式なアンドロイドの『1号』は、表情の乏しい自分の頬を、緩めたいと言い……。

『1号』と、新型である『私』との、優しくてどこか切ない感情の交流を描いた、ラブストーリーとも言うべきSF作品。素朴で初々しい二人のやりとりに注目です。

《特別賞》

《緩応子賞》

「緩慢に反応しない粒子」

著：Wheelie

<http://text-poi.net/vote/21/9/>

タイトルや段落頭など、お題の字の散りばめ方に、さりげなさや拘りを感じる作品でした。

《高濃度文体賞》

「眩暈の果てに」

著：工藤伸一@ワサラー団

<http://text-poi.net/vote/21/12/>

圧倒的な語彙力と韻律に支配された、まさに眩暈を伝搬させるような文章芸術でした。

《二億で賞》

「緩めの生クリームがお好き」

著：豆ヒヨコ

<http://text-poi.net/vote/21/10/>

二億という大金にまつわる、プラス方向にもマイナス方向にも景気のいい作品でした。

――受賞された皆さま、おめでとうございます！
素晴らしい作品をありがとうございました。

（次のページから、作品が始まります。）

投稿時刻 : 2013.06.15 23:14

獲得☆ 4.231

《大賞受賞作品》

ありし日の終わりを作ること/ソーシャルキル

犬子蓮木

人間を殺すには何が必要だって？

ナイフに銃に鈍器やなんか、うん、素手でも殺せるね。だけどもっと良い方法があるんだ。殺しても捕まらない。罰も受けなくて良い。

人間を殺すには空気だけあればいいんだ。

えっ、空気は生きるのに必要だって？

わかってないなあ。必要なものはいつだって毒になる。そして君と僕の空気は定義が違う。ごめん、そんな顔しないでよ。言葉遊びさ。ただのね。

僕らがやるのは、緩慢な他殺。

気になる彼女を空気で殺すのさ。

ソーシャルという空気だね。

かわいそう？ そうだな、たしかにかわいそうだ。でも、世の中そんなもので、もっとかわいそうなことであふれている。じぶんの死の瞬間を選べるなんて、それはそれで幸せじゃないかな。

そう。

彼女は自らを殺すことを選ぶのだからね。たとえそれが僕らが用意したレールの終着点であったとしても脱線したっていいんだから。

世の中は複雑でなにかの因果でどこかが動く。僕はそれを知っているし、誰だってわかっている。ただちょっとだけ計算が難しいだけだ。ちょっとだけめんどうだから誰もしないだけだ。わかっているけどやめようとしていない人がいるだけだ。

僕みたいに。

☆

いじめだなんてものが、なんであるのだろうと思う。

わたしは、中学生で、いじめられている。

きっかけは些細なことで、わたしは覚えているけれど、みんなは忘れているような気がする。以前は抵

抗して、こんなバカなことやめなよってわかった。なんでこんなことするのってくっつかかった。

でも言われたんだ。

「因果応報って奴だよ」って。

バカみたい。そんな言葉で。たしかに最初はわたしが悪かったかもしれない。でも、なんでずっとこんな目にあわなければいけないのかはわからない。

神様がいて悪いことが計量できるのなら、きっとみんなのほうに罪が重いと思う。けれど、そんなものを計る機械が存在しないから、感じていても無視するんだ。友達だった子も先生もあいつもみんなみんな。一見すればなににもない。

深く関わればいじめられているのがわかる。

体に傷はない。

心はもう……存在を信じたくない。感情のないロボットになりたい。ロボットが人間になりたいなんて言葉はまったく意味がわからない。

人間なんてこんな酷い生き物なんだよ。わたしは人間になんて生まれてこなければよかった。

朝、登校して教室に入ると挨拶が飛び交う。わたしが教室に入ってきたのに、わたし以外にみんなが挨拶をするのだ。くだらない遊び。みんな死んじゃえばいいのに。

わたしははじっこの席に座って。鞆から教科書を出す。学校に来たくない。でも、親は休むなんてことを許してはくれない。わたしはもうどうしていいかわからない。

「二人組を作ってくださいね」

授業中。またどうしようもない言葉が聞こえてくる。わたしはもうずっとあぶれていて、先生もいつも諦めてどうにかごまかしている。

やっぱり一人あぶれたわたし。どうしようもなく、恥ずかしく、それでもいつものように先生に言おうとした。そのとき、

「――さん、一緒にやろうよ」

隣の男子がわたしに声をかけてきた。その子はいつもいじめにほとんど関わらず、ひどいこともしないそんな人だった。クラスでも人気のある男の子だった。

クラス中がざわつく。

その子をはやしたてる声。

でも、その子はそんな周りに負けず、ほほえんでくれた。

クラスの女子がわたしを睨み付けるのがわかった。

「うるさい奴らはほっとこう」

わたしは泣きだした。うなづくこともできなかった。

教室を飛び出す。その子には悪いと思う。でも我慢できなかった。涙があふれてしまう。なんでやさしくしてくれたんだろう。きまぐれ？ いつもわたしはその子を見ていた。まさかこんなにやさしくしてもらえるなんて思わずに、ただ別の世界の幸せな人みたいに想っていた。

わたしは今、そんな世界にちょっとだけ許されて、幸せをわけてもらったように思えた。

階段をあがっていく。

これをきっかけにして明日から何かかわるわけでもないことはわかっていた。嫉妬もあれば、口実にだってなる。彼はわたしを助けてくれる王子様でもない。わたしがいたら迷惑で、彼まで巻き込まれてしまうかもしれない。

だから、このささやかな一瞬の幸せを抱いて、もう終わりでもいいやって……。

☆

ほらね。

《入賞作品》
冷やかし
志菜

玉菊灯籠が、吉原の大通りである仲ノ町を照らしている。

幫間の銀八を共に今宵もぶらぶらと廓を冷やかしながら歩いていた惣太郎は、ふと足を止めて格子の中を透かし見た。立膝を突いて気だるげに紫煙を燻らせている妓に見覚えがある気がしたのだ。

仲の町から外れた半籬の中見世なら、一見でも上がることが出来る。

惣太郎が見ている妓に気が付いて、銀八が爪先歩きで近寄り腰を屈める。

「茄子紺の内掛けの美人でやすね？」

返事を待たずに首を捻じ曲げ、遊女に目で合図を送る。

とうに気がついていたらしい妓は緩やかに立ち上がり、格子越しに煙管の口を差し出す。古めかしい立兵庫が似合う、どこか寂しげな顔立ちだ。二、三筋ほつれた後れ毛が細い首に張り付いている。

誘いに応じて、差し出された煙管を受け取れば、交渉成立というわけだ。

が、煙管に添えられた細い指の先が、ささくれて荒れていることに気付き、途端に気を削がれた。

「旦那、どうしやした？」

怪訝そうに見上げる銀八に、

「台所事情を見ちまった気がするぜ」

とだけ言って、惣太郎はついと歩き出した。

近寄ってきた牛太郎に銀八が詫びを入れている声が聞こえたが、振り返らずに大門へと向かう。

台所事情が苦しいのはこっちの方だがと、自嘲の笑みを漏らしながら。

《入賞作品》
恋する乙女はどこにでもいる
永坂暖日

わたし、奪衣婆（だつえば）！ 三途の川で係員をしてるの。お仕事の内容は、渡し賃の徴収。三途の川の通行料は、みんな知ってるよね。そう、六文！ こんなはした金も用意できない貧乏人が来たら、渡し賃代わりに着ている服を剥ぎ取ることになってるの。お仕事だから、追い剥ぎじゃないから！

名前に婆が付いてるけど、心は永遠に十七歳の女の子。ゆったり緩やかに流れる三途の川のほとりで、一応旦那の懸衣翁（けんえおう）と毎日お仕事に励んでるんだけど……わたしが追い剥ぎよろしく服を剥ぎ取るのが役目なら、懸衣翁はそれを木の枝に掛けて垂れ具合を見るのが役目。

ねえ、何か仕事の配分、おかしくない？ 普通、服を剥ぎ取るなんて力業、男の仕事でしょっ。

それを懸衣翁に言っても「だって上役からそう割り振られたんだし。六文どころか服も着てないような変態チックな奴が来たら、生皮剥ぎ取る力仕事は俺だし」って全然相手にしてくれないの。頭に来るわー。マジであり得ないわー。

それにうっかり気が付いちゃってからは、もー、夫婦生活なんてないも同然。だいたい何年連れ添ったのかも分からないくらいだから、あんなの旦那どころか河原の石と同じよ。居ても居なくても困らないし、変わらないし。

だから、だからね……たまーに、わたしたちの仕事ぶりを見に来る閻魔大王と、ちょっといけない関係になったのも仕方ないことなの。枯れ枝みたいなじじいより、嘘つきの舌を引っこ抜く大王様の方がそりゃもう逞しいし男らしいのは当然で、心は十七歳の乙女なわたしの心がなびいちゃうのも無理のない話。

でも大王様とのアバンチュールは半年に一日だけ。忙しい大王様は、それだけしかお休みを取れないの。地獄ってけっこうなブラック企業ね。

今度大王様にお会いできるのは一ヶ月後。ああ、早くその日が来ないかしら。待ち遠しいけれど、あと一ヶ月で愛しい大王様に会えると思えば、懸衣翁のしかた顔を見るのも多少は我慢できるの。多少はね。本当は今すぐにでも、懸衣翁の上に河原の石を積み上げたいけど。

あら、誰か来るみたい。六文銭は持ってるかしら。心は永遠の十七歳でも見た目は名前通りのマダムだから、力仕事は体に堪えるのよ。

いつかこの川を渡るあなたも、わたしのためにちゃんと六文銭、用意しておいてね。

《入賞作品》
A・I・応答せよ
碧

「頬が緩むとは、どういうことですか」

と、私の傍らにやってきたアンドロイドは言った。

「1号ってさ、時々子供みたいな質問をするよね」

「私は、そういう風にプログラムされているので」

1号はアンドロイドとしては実験的なタイプだ。必要な知識全てが最初からインストールされているわけではなくて、必要に応じて必要な情報をA Iが収集し学習していく。だから時々、こんな初歩的な語彙についても質問したりする。それに本体の方も旧式だから、動きはぎこちないし、顔の表情は乏しいし、構成される音声もかなり抑揚がない。

「慣用句だよ。まあ、嬉しくてニコニコするって感じの意味」

「それは、良いことですか？ 悪いことですか？」

「いいことでしょ、嬉しいんだから」

少しの沈黙の後、1号は言った。

「私の頬は緩みません」

「1号の顔はあんまり動かないもんね」

「それは悪いことですか？」

「仕方のないことなんじゃない？」

そう言うと、1号はしばらく沈黙した後、どこかへ立ち去った。

私はやりかけていた作業を再開する。新しく博士が作ろうとしているロボットの本体を作っているのだ。やがて1号は再び戻ってきた。

「私は、あなたが好きです」

「ええ？ それ、どういうこと？」

「恋をしました」

「ねえ、1号、恋をするってどういうことかわかって言ってる？」

「わかりませんが、これまでに収集した恋というものの情報に照らし合わせると、私は今、あなたに恋をしたと表現するのが一番妥当だと判断しました」

「わからないのに、って」

私はその言葉に、なんだかイラっとしてしまった。イラっとする感情は苦手だけど、私は人間と同じ感情を持てるようにプログラムされているから仕方がない。私は人間と同じ感情を持てるように仕組まれているのに、恋というものはまだ知らなかった。なのに、私より未発達なＡＩを持っているはずの１号が愛を告白してきたことに、イラっとしている。これは嫉妬というやつだ。

「困るよ」

と私は言った。一号が無表情のまま首をかしげた。

「それは、良いことですか？ 悪いことですか？」

「良いことでも悪いことでもないよ。私は、困るんだよ」

「あなたの頬は緩まないのですね」

「緩まないよ、困ってるんだから」

「博士は、私があなたに恋をしたと知って、とてもにこにこしていました。頬が緩んでいました」

「それは、博士だからだよ」

「あなたが嬉しくないのなら、悪いことではないのですか？」

「良いことでも悪いことでもないよ。私が困ってるだけだよ」

そう言うと、１号はほんの一瞬だけフリーズした。時々処理が重くなって動かなくなることがある。多分恋という感情エネルギーを使ったことで重くなったんだ。それから、無表情のまま、言った。

「私は、あなたが嬉しくないなら悪いことだと思う。でも私は、あなたに恋をしたことを嬉しいと思う。なのに私の頬は緩みません」

それからまた一瞬フリーズして、復帰して、続けた。

「お願いがあります。もしあなたが、私の気持ちに困らなくなる日が来たら、私の頬のネジを緩めてもらえますか」

「そんな日は永遠にこないよ」

「そうですか」

博士は私も本当は恋に落ちたんだと断言した。

「仮にそうだとしても、困ります」

「そうだなあ」

「恋をしても、必ずしも嬉しいものではないのです」

「そうだなあ」

「１号は子供のようなのです」

「そうだなあ。それが僕は、愛しいと思うよ」

私はそうは思わなかった。

１０年後、人工知能規正法が改正され、不確定要素の高い動きをするＡＩを搭載したアンドロイドは処分されることが義務付けられた。

「最後だからね、１号。ネジを緩めてあげるよ」

博士はそう言いながら、１号の顔の部分を分解した。私は未だに１号の愛に困っていたので、約束は果たさなかった。

「１号、君は笑っている？」

「わかりません。笑っているかはわかりませんが、ひとつだけわかりました。恋をしていると、嬉しいだけではないのですね」

そう言う 1 号の頬に近い部分の部品は緩んで、がたがたになっていた。私にはそれがずいぶんと穏やかな笑みにも見えた。そうして私はまた死にゆく 1 号に嫉妬するのだ。

《緩応子賞》
緩慢に反応しない粒子
Wheelie

緩やかに身を振る。意識はまだ朦朧としていて、掛け布団は水を含んだように重い。天井灯はいつの間にか消されていた。夜が明けようとしている。寝返りも打てないほどに疲労していた。腕を持ち上げ自分の手の甲を見つめる。関節の軋む音が聞こえる。首を捻ると隣の枕は冷ややかに窪んでいた。女は何処に行ってしまったのだろう。

応じる女の熱に浮かされた声が、まだ耳にこびり着いている。彼女は言った。
「足りないの」と。
「何が？」俺は尋ねる。

俺の背中に手を回し、彼女は呼吸を整えていた。
「残された時間の分量が」

消えいるような声で、女は「時間の分量」と言った。奇異な言い回しだと思ったが特別の言及はしなかった。女は少しだけ身を引き、シーツから砂を掬い取るような動きをした。そうして掌の上の存在していない物質を大切そうに見つめていた。

子細に思い出せる。女は時間を止めるべく足掻いているように見えた。空が白み、誰も居ない室内を照らす。俺は時計を探す。
「砂時計……？」

ベットサイドの目覚まし時計が置かれていたはずの場所に、何故だか砂時計が置かれている。三分だか五分だかの小さな砂時計。彼女が置いていったのだろうか。鈍重な思考のままに光の指す方向に顔を動かす。淡く発光する窓が、外界の現実感を損なわせている。錆び付いたような首を動かし、再び砂時計に目を向ける。

砂は
まだ
落ち切っていない。

目を覚ましてかなりの時間が経過しているはずなのに、その小さな硝子の砂時計はまだ動き続けている。

いつまで眺めていても、流れていく砂は減りも増えもしない。

「足りないの」女の声が耳にこびり着いている。俺は身体を動かすことが出来ない。砂に埋められたかのように。

10%

しゃん

光太郎の夢は、光の速さで敵を圧倒することだった。

子供の頃見たコミックに、球速 160 キロに達するとボールが光の球になるシーンがあった。

ベースの手前で白く輝き、軌道を見失った打者はまぶしさのあまりバットを振ることも忘れてしまう。

コミックの世界の出来事と思う反面、あり得ないことではないかもという期待もあった。

160 キロという速さは、当時プロ野球界では誰も達成していなかった。

いつか自分が必ず。強くそう願いながら、光太郎は文字通り人の3倍練習を積み重ねてきた。

けれども、世の中は公平にはできていない。

高校時代に最速 146 キロのストレートを投げ、県大会では強豪校を破り大金星をあげた光太郎だったが、それが投手としてのピークとなった。

決勝では0-1で敗れたため甲子園には出られず、またスカウトが太鼓判を押せるほど圧倒的な球速をものにできたわけでもない。

夢の90%ほどはかなえたのに、10%が足りなかった。160キロの90%では、球が消えるどこか、コースを間違えればスタンドに運ばれてしまうのだ。

自分には、どうしても残り10%が手に入れることができない。

それを悟るまでに、光太郎は5年の歳月を必要とした。

社会人野球でもまれつづけたものの、それでも球速は148キロ止まり。

ストレートにこだわるあまり、球種の少ない光太郎は、球威の衰える終盤に打ち込まれることがたびたびだった。

コーチには「もっと緩急を使え」と当たり前の指導をされたが、光太郎には緩いボールがない。

140キロ台のまっすぐの他は、130キロ前後のスライダーと120キロ台のチェンジアップくらいなものだった。

現実的に考えて、100キロ台の変化球が必要だ。

またしても後半のイニングに打ち込まれた後、ベンチに下がり光太郎は痛感した。

40キロの緩急があれば、打者を翻弄できる。

高校時代から分かっていたことだったが、やはり自分が投げたいのは光の速さの球だった。

社会人野球でも芽が出ず、高校時代のチームメイトからの応援も近頃ではまばらになっていた。
無名校に甲子園行きの夢を与えた英雄も、今では過去の人になりつつある。
むしろ大学を出て、企業で働きはじめた彼らの方が光太郎にとってはまぶしいほどだ。

誰の期待にも応えられず、自分の夢もかなえられず、社会人野球という最高峰一步手前の舞台でユニフォームをいずれ脱ぐことになる。

俺は野球が好きなのではなく、光の球を投げたいだけなんだ。
練習後、日が落ちかけたグラウンドで光太郎は投手としてのアイデンティティーを確認した。

足元に転がるボールを握る。
チームには解散の噂もある。
それが現実となった時、光太郎の選択肢は多くない。
野球を辞めるか、地方の独立リーグの入団テストを受けるか。
せいぜいその程度のものだろう。

チームメイトがいなくなったグラウンドで、光太郎はマウンドに立ち、思い切りふりかぶった。
勢いよく腕をふり、バックネットめがけてボールを投げる。
指のかかりは最高だ。
リリースの瞬間、ピシッと爆ぜる音が耳元に響いた。

が、それでもボールが光るはずもない。
そう思った瞬間、わずかコンマ数秒の間、確かにボールが消えた。
夕日が反射したせいかもしれない。
けれども、光太郎は残りの 10 %を手に入れたような気がする。

緩急か、と知らない間につぶやいていた。
重く、圧倒的な扉を完全に開けたとは言えないが、ようやく次の扉へ進める気分になった。
ホームベースの近くまでボールを取りに行くと、光太郎は握りを変えた。

やはり緩いボールと言えば、カーブか。
ただのカーブでは面白くないから、ナックルカーブを試してみるか。
光太郎はもう一度マウンドに立つと、今度はゆっくりとしたフォームでスローボールを投げてみた。

《高濃度文体賞》
眩暈の果てに
工藤伸一@ワサラー団

緩やかに流れる有刺鉄線の間を潜ろうとして血まみれになった身体の置きどころに困り果てた挙句に脳味噌まで蕩けそうな熱気にやられ、むしろその脳が世界の空気を沸騰させているのだと気付いたが故に血潮が蒸発するのも無理はないのだからと思えば何もかも合点のゆく塩梅なのだからして、これより先に起こりうる全ての可能性を排除してもなお倦怠感を払拭することもままならぬまま、ただ徒に人生の過ぎゆく様を俯瞰するより他に術もなく時代は倒錯し続けるのだった。

だからといって別に手応えがなかったわけではなく、このようにして気を遣わせてしまったことへのせめてもの御礼を兼ねて水脈の元を辿ってみたら、棘だらけの道筋を歩まざるを得ぬ事態から逃れることは出来なかったのであり、かつては存在したはずの遊歩道の痕跡を探す手立ては最初から諦めていたにしても、このまま進み続けるためにはもう残りの血液からして足りないのは十分に理解しているのだから。

とりあえず行けるところまで行こうとする意志すなわち思考から解き放たれた自由な精神の方向性に従うことの大切さを今更ながら思い知りつつも、自らの内臓を滋養として食み蝕む虫のように脆い関節の痛みなど感じないふりをして、この目論見を企てた陰謀の深淵の奥底に潜む不断の決意を蹂躪するような心持さえ忘れなければ。

いかに空間を移動することが不可能だとしても精神世界の暗闇に果てなどあるはずもなく、いっそ深く瞑想して時間を遡る手法を用いれば済むことは予め知っていたというのに、あえて目に視える形で実践せねばならぬなどと息巻いてしまったのが運の尽き突き弾く皮膚の感覚それだけに意識を集中して、何も畏れることなど無かった子供の頃の無垢な魂を取り戻したい一心で斯様に無様な様態を呈してしまった幼形成熟の指先にまで沁み渡る悔恨の厳格さに眩暈は止まず。

見栄は肥大するばかりで見る影もなく張りを失って海水と血液が混濁して鱗を潤す瞬間に希望を託し、もう宝箱には何も残っていないからといって開けずに済ましてきた過去を呪う戒めの代価として、大腿骨の辺りに充満する草木の焼ける匂いに咽び泣く純粋な日々など過ごしたこともないというのに。

左右の見地から中央に寄りがちな政治的配慮さえ気にしなければ、倫理的欠如など血尿ほど薰る立ち上

る納涼の彼方に聳える聴こえる消える時にこそ絶頂に至る快樂の浅ましさに耽る不愉快な演説など容易くて、今から最後まで突っ走る原動力として霞みながら砕ける流水の冷たさ儚さ憎めなさ情けなさ。

空洞の図像を思い浮かべながら無償の憎悪を恋人に送りつける世間体の耐え難き有難さ、数行目には潰えてしまう命の宿り木に凝り固まった地層の連なり、使い捨ての眼球を睜る如き恒星の軌道の妖しい勇ましさを讃える数式の甘美な響き、味わいも見境もなく舌先に吊るされた縄紐の目の粗い繊細な緊張感、そしてその偉大な功績なればこそ。

引き出しながら落ちていく物語を伝え這い蹲る地点の抵抗を寸止めにして、科学の未来を占う美学を磨く見縊る通じない遺伝子の向こうから不意に噴き出す不満の料簡、利権は唐突に終りを告げ包み隠さず罪深く爪先の綻びを隠すことなく乱すべからず迷う逃亡者の痕跡から漂う臭気に含まれた現在進行形の終末。

未遂のまま続く虚構の悪びれない様相に抱かれながら、未必の身柄を構成する両極の磁力に反発する三人称複数の語族・貴族・家族、いずれの集団にも共通する概念の記念碑的な自動化された幻聴の気味悪さ、言葉を尽くさんとして筆舌の溜まり場に吹き荒ぶ野心を持て余す淫らな質感さながら、面目を潰す理念は禁断の地域への言及なくして甚大なる虚飾に極まれり。(了)

さよなら

丁史ウイナ

太陽の熱はとても冷たいのです。ウィーブは自身を抱きしめました。肩が小刻みに震えています。太陽程度では十分な暖がとれません。

仲間たちはどうしているだろう……。ウィーブは首をすくめて思いを馳せます。もうへその緒を通過して、向こう側に到着しているかもしれない。ぼくは置いてけぼりになったんだ。――ウィーブの考えることは徐々に降下してゆきました。じわりと沁みるものがウィーブの胸を突き刺します。

なにもない真っ暗な空間で、色褪せた太陽だけがウィーブに光を与えています。しかし太陽は冷たいのです。ウィーブは太陽に背中を向けました。背中に微弱な熱がぶつかります。閉じ込められたように色のない景色が、どこまでも続いているように見えました。ずっとずっと遠くに、ちっぽけで緩やかな連星が窺えるだけで、ウィーブの心を満たすものは、なにもありません。必然的にウィーブは、胸の内にこもっている熱、自分の記憶に、目を向けてゆくのです。

……あるとき、宇宙のいたるところにワームホールが出現しました。宇宙が膨らむときに必要なエネルギーが、ワームホールになったのです。ウィーブの仲間たちは、それを〈へその緒〉と呼びました。……

太陽はいびつな形をしています。いつの間にやらまた太陽と向き直ったウィーブは、じっと薄い膜を眺めていました。膜の内側で、かろうじて生成され続けているヘリウムが、力なく漂っています。ウィーブは太陽の膜を指でつつきました。ぶにぶにとまるで生き物のようです。しかし生きてなどいません。ウィーブのいたずらに、なにも応じず、されるがまま膜は揺らめきます。

……宇宙はつながってゆくのです。母親宇宙から、子ども宇宙へと。へその緒が生じ、そこから新たな宇宙が膨らんでゆきます。そしてへその緒が切れたとき――母親宇宙と子ども宇宙の因果が断ち切れたとき、赤ん坊が産み落とされるのです。……

ウィーブは両手を枕にして、太陽のそばに寝転がりました。もう仲間と会うことはできないでしょう。仕方のないことなのです。個よりも種を尊重し、なによりも生き残ることを優先する。それが生命体全体の揺るがない欲求であり、ウィーブにとっても最大の願いであるのです。

諦めはついていました。だというのに胸が痛い、痛い――ウィーブは涙を拭きました。拭き損ねた涙が、暗闇に浮かんで、太陽の膜を通り抜けてゆきます。少しだけ、太陽の熱が温かくなったような気がしました。ウィーブは体を起こします。

連星は、沙漠に紛れたダイヤモンドのように。太陽は、廃れてしまった枯れたオアシスのように。ウィーブは立ち上がって、静かな宇宙を見渡しました。なにもない足元。なにもない天井。気付けば床と天井が入れ替わっていて。それでも太陽はすぐそばにありました。太陽にはかつてのような炎はなく、ただ消え

入るような冷たさの中身と、その膜があるだけでした。膜のなかには、塵と、砂と、ヘリウムと。

突然ウィーブは、その塵のなかに、過去の栄光を見出しました。それは太陽の最後のあがきのようでもありました。その塵には、生命が繁栄した姿――地球のおもかげがあったのです。

ウィーブは今度こそ涙を流しました。堰き止めていたものが崩れてしまったように、涙はとめどなく流れました。拭ういとまも与えません。ウィーブはたくさん泣きました。泣けば泣くほど、ウィーブの胸が潤ってゆきます。気力が甦ってゆきます。そのたびに太陽も明るくなっているような気がしました。仲間とはぐれて、生きるのを諦めてから、この太陽はずっとウィーブのそばにいてくれたのです。ウィーブは強く太陽を抱きしめました。

太陽はパァンとはじけて、なくなりました。

緩やかな歩み、応じる心

栗田柚香

不恰好な建物の公民館だった。建物の大部分は、平行になった三階建ての小学校を再利用している。が、門の前には、視界を遮るように 2 階建ての白い箱が立ちふさがっている。こちらが新館で、入り口をくぐるとすぐに受付がある。

周囲には、地域での催し物を宣伝するチラシが放り込まれたラックがある。緑色の掲示板には、市役所からのお知らせといったポスターが貼りだされている。どちらも手作り感が溢れている。

黒い鉄筋の階段の踊り場には、もうすぐ七夕ということで、色紙を切っただけの短冊がべたべたと貼り付けられている。2 階にはギャラリーがあるらしい。階上から騒々しい足音が、コンクリートの壁と反響して伝わってくる。

休日の昼間ということもあり、結構な数の人がいた。親子連れが部屋の隅で集まっているのは、何かの体験教室だろう。奥の休憩所では、だらけきった姿勢の中高年が椅子に身体を預けている。残念ながら、囲碁や将棋に興じる趣味人の姿は見られない。

私は足早にそこを通り抜けると、旧館への渡り廊下へと通じるガラス扉を開けた。扉に書かれた「旧館」という白い文字の上部に、剥がしそこねたセロテープの糊が残っていた。

靴裏に跳ね返る湿った木材の弾力。蛍光灯の輝きが色褪せ、混じりけのない白壁が微かに黄色味を帯びる。もとは小学校の建物だったという旧館の中は、新館につどった人々の喧騒から遠くはなれ、硬直した静寂に満たされていた。

私の左側には、街灯に照らされた運動場、私の右側には、黙りこくった夜の教室。

それでも時折、どこからか話し声や足踏みが響いてくる。地域の劇団やダンサーが、稽古場として利用しているという話だった。けれど今自分がいる階は、自分以外空っぽらしい。思わず足が早まる。

ヘアピンカーブのスロープを通り抜けて、1 階から半地下へと下る。その足下の茶色い扉は、いかにも用務員室といった風情で、実際にかつては用務員室として使われていて、今も用務員一もとい警備員の詰所になっている。

私は暗がりに近づいて扉を叩く。

目の高さにある摺りガラスの奥で影が動き、扉が開いた。1 人の老婆が顔を出す。

私は少し当惑した。父の勤務は 13 時からで、それまでは詰所にいると電話で言っていたのに。

「あの、猿又はいますか。家族のものなのですが」

腰のまがった老婆はこちらを見上げ、私の目を覗きこんで、ニッコリを微笑む。

「綺麗な娘さんだね。だけど、ここに来るにはもう年をとりすぎているかな」

しわがれた、けれどハッキリ聞き取れる声だった。

「残念だけど、今日はもうお帰り」

そう言って、扉を閉めてしまった。

私は呆然として、辺りを見渡す。父は今どこにいるんだろう？

それからすぐに解決策を思い出す。携帯に電話すればいい。父はいつでも、携帯を持ち歩いているはずだ。

母が毎日言いつけるものだから。

すぐに取り出し、発信する。案の定すぐに父は出た。

「おお、今どこにいるんだ。母さんが心配するぞ。早く帰りなさい」

心配する？

何を言ってるんだろう。

休日の昼間くらい、好きに出かけたっていいじゃないか。

憤慨して電話を切る。用務員室の扉は閉ざされたままで、摺りガラスに、外の街灯の明かりが反射している。

たしかにもう帰ったほうがいい。こんなに遅くなってしまったんだから。

スロープを半分だけ上った所で、向かいから下りてくる女の子と鉢合わせた。

とても小さい、3 歳程度の女の子。私の歩幅なら 15 歩程度で上り終えるスロープを、よちよち歩きで、ゆっくりゆっくり下ってくる。

親はどこにいるんだろう？こんな小さな子供が、1 人で歩き回っていてはいけない。

きっと、受付周りにいた親子連れの誰かだろう。親が目を離れた隙に探検を始めてしまったのだ。けれどここは危ない。もう外はあんなに暗いのだし。

私は女の子に歩み寄って、屈み込み、両腕をさし出した。

「どうしたの？ここから先は行っちゃダメだよ。一緒に一」

「邪魔しないで。1 人でおりれるもん」

さっきの老婆と同じくらいはっきりした口調で、女の子はこちらを睨み上げた。

子どもながら固く決心した目つきで、思わずこちらが気圧された。

女の子は私の横をすりぬけ、相変わらずのよちよち歩きで下っていく。

「じゃあいいよ、一緒に下ろう？」

女の子は、今度は無邪気な驚きの顔をこちらに向けてくれた。それに応じて、私はニッコリと微笑みかける。こんな優しい笑顔が自分にできたんだと、驚くくらいに。

女の子の足音は、ペタペタと言う。足先がやたらと外側を向くので一足ごとにバランスが崩れそうになる。

私は女の子の歩調に合わせるので、一步一步の間隔が極端に長い。

白いスロープの床面に、2 つの黒い影が伸びていく。

ペタペタペタペタ、カツン。

ペタペタペタペタ、カツン。

スロープの果てにたどり着く。

よくやったね、と声をかけると、女の子は、どうだ、という顔でこちらを見上げた。

彼女の顔に、明るい初夏の日差しがふりそそいでいる。

私はその時初めて、子供の顔を愛らしいと思った。美人だとか、顔つきが整っているという意味ではなく、無邪気なこどもという存在が愛らしく、尊いものに思えた。

女の子と別れ、私は警備員室に向かう。

目の高さの位置に、「警備員室」と書かれたプレートがはまっている。

ノックすると、奥から聞き慣れた声が無愛想に返事した。

「忘れ物だよ、お父さん」

バタついた声が返ってくる。本当にしょうがない親父だ。

私はそのまま振り返らなかった。

女の子も、もう私に興味をなくしたらしく、駆け足で出口に向かって走り去ってしまった。

よるごはん

茶屋

応子は不本意ながら夜ご飯を作る。

今日はそもそも外食の予定だったのだ。それが仕事が遅くなり、帰ってきた頃にはだいぶ遅くなっていた。それなりの店はもう閉店時間で、開いているのは居酒屋か外食チェーン店ぐらいだった。テンプレートなものを食べたくなかったし、居酒屋の雰囲気も今日の気分には合わなかったので、結局自炊することにした。

ご飯は冷凍したものを使う。

レンジがチンして、解凍だ。

使っているいささか古いレンジは熱の供給がいささか均等ではなく、冷たい部分とパサパサになった部分が混在する。そのせいか解凍ご飯はなるべく避けるようにしているのだが、やはりご飯を炊く時はなるべく一気にやったほうが効率が良いし、大量に炊いたご飯はやっぱり余ってしまうので冷凍してしまう。するとやはり定期的に解凍ご飯を処理しなければいけない。

応子は思う。

これは効率を追い求める現代社会の負の側面なのだ。

反抗してやろう。

もうこんなことはやめてやろう。

革命だ。

なんてことが冗談めかして頭によぎることもあるのだけれど、結局は面倒さには立ち向かえず、日常の忙しさによる忘却にもかき消されてしまう。もとより本気ではないし、実行に移そうだなんて決意したことは一度もない。

せめて、食感をどうにかしようとチャーハン、というかケチャップライス、をつくろうと企み冷蔵庫の中でケチャップを漁る。

ない。

いや、ないわけじゃない。

けれどもしばらく使っていなかったケチャップはだいぶ小さくしぼんでべったんこ。さらにキャップの隙間から固まったケチャップがコンニチハしている。

いや、昼なんでこんばんわっすよと頭のなかで突っ込みながらケチャップをゴミ箱へぶん投げる。

ごんっとゴミ箱には命中したものの、ゴミで入り口を塞がれた箱はガタンと倒れ丸まったティッシュが転がった。

応子は舌打ちをして、ゴミ箱を片付ける。

ゴミ箱の中身を捨てようと思って三日目。明日だ。明日こそは捨ててやる。

応子は機能と同じ決意をした後、顎に手を当て考える。

ケチャップはない。

ケチャップを使った以外のチャーハンの作り方は知らない。

いや、醤油とか胡椒を混ぜればいいのだろうが、絶対に失敗する。ケチャップほどの味の安全性を確保する自信はない。

では、どうする。

確か納豆があったはずだと冷蔵庫の中を再び漁ってみる。

一人暮らしの応子の冷蔵庫の中には大した食材は入っていないのだが、酒類が多いし、今も応子は多量の酒を摂取している。

発泡酒二缶に日本酒一杯にウイスキーをロックで少々。

それでやや酩酊しているものだから、納豆もなかなか見つけれられない。

やっとの思いで納豆を見つけ、手にとって冷蔵庫を閉めて彼女は思うのだ。

あ、別に納豆食いたい気分じゃねーや。

そっと納豆を目指して考える。

もう、カップラーメンでいいや。

確か、買い置きがあったはずと思いながら、電気ケトルに湯を入れて、カップラーメンを探す。

後は簡単。中身を出して、お湯を入れて、三分待つだけ。

ちく

たく

ちく

たく

緩やかに時は流れる。

緩やかに流れてほしくない時だけに。

ちく

たく

ちく

たく

三分経って蓋を開けた時、心と気づく。

かやく入れ忘れたよ、おい。

しかたがないのでかやく後入れだ。

時折口に入る具材はとっても硬くて、何だかまずい。まずいけれども仕方がない。もう取り返しがつかないことなんだ。後悔はもう遅い。もうやり直しが効かない。もう二度と訪れない過去。

応子はラーメンを食べ終え、満腹になりながらも、何だか泣きたくなってきた。

どうして？

どうして？

どうしてこんなことになってしまったの？

彼女の目の前には、ラップに包まれたごはん。

さっき暖めた冷凍ご飯があった。

投稿時刻 : 2013.06.15 23:38

最終更新 : 2013.06.15 23:43

獲得☆ 3.462

ユルミナン

雨森

「せんせい、こんなんでいいのですか？」

そう言って彼女が挙げた手は少し低く、指は開いていた。

「良いわけないでしょ、そんな緩さで」

「え？」

「もっと緩く！ 緩くするのよ！」

先生の声は緩くなりかけた教室の空気を切り裂くように鋭かった。彼女は逆にピンと張り詰めた顔でごめんなさい、と手を下ろす。ゆっくりと。

「そうよ！ 今の下ろし方よ！ 分かってきた？」

「え？ え？」

「だからダメよそんな声じゃ！ 声も緩くしなさい！」

「ふ、ふ、ふ……ふあい」

「よし！」

――二人の応酬を僕は少し斜に構えて見ていた。まるでアホみたいだ。

「今度は君のばんよ、さあ話してみなさい」

「あ？ 僕もですか？」

先生は憤懣の表情を更に強めた。

「あなたもよ！ 子どもは皆、そうしなきゃいけないの！」

ヒステリックに叫んだ先生の眉は『へ』の字に曲がっている。やれやれだ。

「どうしてこんな事やらなきゃいけないんですか？ バカじゃね？」

「そんな言葉遣いはダメよ！ もっと緩くしなさい！ もっと！」

……わけが分からない。

「ふえいふえい」

いつまでもこんな所で居残りをさせられるのも時間の無駄と思い、僕はとりあえず緩くやってみた。隣の席の彼女は怯えるような目で僕と先生を見ている。こいつもアホだ。

「……そうよ。それでいいの」

「ほうでしゅかぁ？　ボクちん、こんなんでもゆるゆるに見えましゅか？　せんしえいのおめめはちゃんと見え見えしてましゅかねえ？」

唇を突き出して先生へ向けると、それまで軟化していた先生の顔が一気に急変した。

「それは緩いんじゃない！」

同時に不愉快な音が耳をつんざいた。先生がその爪で黒板を引っ掻いたのだ。

「もう、うるせえよ！」

「その態度を改めなさい、と先生は言ってるのよ！　手遅れになるかもしれないのよ！」

眼が血走っていた。僕は反射的に叫んでいた。

「何が手遅れだ！　アホ！　勉強はちゃんとやってるんだ、逆にこんな事に付き合っていると受験が手遅れになるだろうが！　死ねババア！」

隣の席の彼女が耳を塞いで机に突っ伏した。顔を青ざめた先生は糸が切れたように教卓に寄りかかる。

「……そうね。あなたはちゃんとやっている。それで良いのね」

まるで世界が終わるみたいな顔をしている。なんだこいつ。言うこと言ってしまったし、この場合は教室を出て行くのが格好がいいだろうかと僕は思った。

「じゃあ、明日は塾が早いんで帰ります」

「あ、あの……」

隣の席の子が何か言いたそうにしていたが僕は無視した。先生は燃え尽きたようにその場で固まっていた。

学校を出て、僕はひとまずコンビニに向かった。お腹が空いていたし、漫画誌も買いたかった。空の夕暮れが深まっている、本来なら手早く買い終えて塾へ向かわなければいけなかった。

「みんな、ちゃんと真っ直ぐ家に帰るのよ？」

「ほあああい」

レジにいるおばさんの言葉に三人組の高校生と思われる男どもが合唱していた。アホまるだしの顔で。

レジに雑誌と調理パンと炭酸飲料を放り出す。おばさんは不愉快げに僕の顔をみた。アホの顔だった。

「真っ直ぐ家に帰るのよ？」

同じような事をおばさんは僕に言った。支払いを終えた後で僕は、

「死ね」

と顔を突き出しておばさんに言ってやった。それだけでまるで大事件のようにおばさんはうろたえ、背面の煙草が詰まった棚にぶつかった。ちょっと愉快だった。自動アナウンスが「ありがとうございました」と言ったのでもっと愉快だった。

「死ね、死ね、みんな死ね」

まるで魔法の言葉だ。それを言うとどの大人も青ざめ、または顔を背け、世界が終わったように慌てふためく。なにが緩くだ。なにが手遅れだ。手遅れなのは脳みその緩みきった大人のほうだ。

夕暮れが深まると夜になる。夜になったら子どもは外出してはいけないと法律でも決まっているらしいが、警察官がそこらをうろついている訳でもない。

夕暮れは黄色かった。ふだんは白い空が少しずつ東の方角から黄色に染まってゆき、やがては夜になると青一色になると言う。僕はその青一色の空を見たことがない。大人になれば見られると両親に教わったが、その両親でさえ間近に見たことはないようだ。

このままあてもなくブラついて青一色の空を見てやろうかと思った。きっと何も楽しくない、何てこと

ないものだろう。それを明らかにしたいと思った。

その夜、世界は滅亡しなかった。崩壊は緩やかに進んでゆくのだろうと僕は思った。

《二億で賞》
緩めの生クリームが好き
豆ヒヨコ

私はカウンター下のラックから、直径 25cm ほどのガラスボウルを取り出した。次いで蛇口をひねり、8 分目くらいを目指して水を注ぐ。

「おっと」

ボウルは思いのほか重くなり、支えている左手からシンクへなだれ落ちそうになった。とっさにカランに添えていた右手を差し出し、難を逃れる。うかがうようにチラと振り向くと、大叔母が待ち構えたようにニッコリ笑ってみせた。

「ユキさん、何事もていねいに、心をこめて頂戴ね」

はい了解です。私も、マックス朗らかな笑顔をつくって応える。心の中で大きく舌打ちしながら冷凍庫を開け、買っておいた大袋入りの氷を取り出した。キッチンばさみで封を切る手ももどかしく、水をはねかしながら先ほどのボウルに氷を放り込んでいく。

ああ、なんでこんなことをしているんだろう。こんなときに？

考えても仕方がないとは分かりつつ、私はイライラを抑えられなかった。すべては金のせい、大叔母が大金持ちなせいだ。

FX で全財産を失った夫に残されたのは、恐ろしいほどの執念だけだった。2 億という負債額に腰をぬかし、勤めているスーパーのレジ打ちで返すとしたら何年かかるか計算しては奈落の底に突き落とされている私を尻目に、夫は余裕のある親戚 一絶縁されている夫ではなく私の一 につけている隙はないかと血眼で探していた。

大叔母はやはり借金で勘当されていた祖父の妹で、宮家の末裔に嫁いだ。夫を病で早くに亡くし、大戦後にいったん没落はしたものの、資産運用の才に恵まれ今では長者番付に載るほどだと身内ではもっばらの噂だった。

まずは正攻法だと突撃した私たち夫婦を、大叔母はイギリス式にもてなしてくれた。美しいティーカップに熱々の紅茶が注がれ、近ごろ食べるものにも困っていた私たちは、むさぼるように焼きたてのスコーンをほおばった。

「それで、お金を用立ててほしいというのね？」

大叔母は気の毒そうに眉をひそめながら確認した。

「そうなんです、もうにっちもさっちもいなくて」

夫は、端正な顔つきをゆがめて懇願する。一見誠実そうに見えるところがかつては大好きで、今は憎くて仕方がなかった。

「そうねえ。でもねえ、お友達じゃない人にはお金を貸さないって、旦那様に約束してるのよ」

約束。死ぬ間際に言い交わしでもしたのだろうか。まるで別世界のような大叔母の態度に、怒鳴りつきたい感情を必死で抑え込む。

「でも応援したいわ。血がつながってるんですもの。そうだわ！」

子どもじみた声で、大叔母は嬉しそうに手を打った。

「わたくし、スコーンが大好きなのよ。一番好きなのはね、かたく香ばしいスコーンに、緩めに立てた生クリームを添えたものなの」

ぽかんと口をあける私たち夫婦に、大叔母はトロリと流れるようなクリームを見せる。藍色の深皿に盛られたそれは、バターほどこってりせずホイップクリームほど軽くなく、確かに美味しそうだった。

「ええとユキさんだったかしら？ ぜひ私のためにクリームを泡立てて頂戴。ぴったりの泡立て加減にして頂けたら、私たちはもう気のおけないお友達よ。そうなれば幾らでも融資してさしあげられるわ」

一世一代の勝負は、その3日後、つまり今日に定められた。私はひとまわり小さめのボウルを氷入りのボウルに重ね、慎重に生クリームを注ぐ。

ちらりと夫を見た。すらりとした体をスツールに預けて、緊張しきった表情でこちらを睨みつけている。ふいに、この勝負が終わればこの男とも終わりだろうという気がした。馬鹿げた気まぐれに人生をかけなければならないなんて、どこまで捧げつくさなければならないのだろうと虚しくなったのだった。

泡だて器をクリームから抜き取った瞬間、私は自由になる。

そう思うと、一気に肩の力が抜けた。借金のこと一瞬忘れた。まだ液状のクリームに泡だて器をつっこみ、私はいよいよ腕を動かし始める。

ふわふわでもなくこってりでもない、あの柔らかい舌触りを求めて。大叔母の微笑む様子が目の端に映った。彼女はすべてを知っているのかもしれない。

「さあ、食べさせて頂戴！」

大叔母が最高の笑顔をつくり、スコーンを大きくちぎってクリームをのせた。私はそっと目を閉じた。

世界中の誰よりもっと

ひやとい

騒がしい風景は彼のもとを通り過ぎながらじっと様子を伺っていたのだが、焦れたらしく向こうの標的を探しに旅へ出た。助かった彼は一安心して一服茶屋で団子などを平らげていたが飽きてくると立ちあがり西へ西へと歩くことにした。なんでも西の方角には天狗の面がビル群をかいくぐりながら空を飛び、光線のようなものを発しているというので常人は旅を避けなくてはならなかったのだが、彼には避けられない事情があった。歩きながら、師匠の言いつけを思い出す。

——ヨータや、お前は数千年もわしのもとで修行に励み、イタミに耐えてがんばった。感動した！

師匠はその時、いまさら小泉語録などを読んで感動しているらしかったが、余計なツッコミを入れることはしなかった。何にハマッてもいい、幸せならば。と、彼は今までに出会った数千人を超える、生きる希望をなくした日雇い派遣労働者のことを思いつつ、そう念じた。

——で、だ。わしはお前を野に放つことにした。もうわしに残された時間も少ない。お前の人生をこの上わしの道楽につき合わせるわけにもいかんじゃろう。そこでだ、お前には今までに積み重ねてきた秘術を、外科医、もとい下界のもののために奉仕することにつかってほし～の。そういえばヨータ、ほし～のあきちゃんと付き合うにはどうしたらいいかのう。わしはのう、ほし～のちゃんのあの大きな胸に似合わぬ妙に不自然に細い胴に、このあごに蓄えたよく伸びる髭を巻きつけてからあきちゃんの体をコマのように、あ～れ～あ～れ～と言わせながら回し、回り終わればまた巻きつけ同様にするのが後生の願いなのじゃ。ああ、あきちゃんのあのか細い身体が、このわしのひげに巻きつかんとする時、あきちゃんはその気持ちよさのあまり思わずこう叫ぶのが目に見えるようなのじゃ。ロールミー！ ロールユー！ オーマーリルーガー！

あんたは変なギャグマンガの読み過ぎではないかと彼は思ったが、やはり師匠にたいしてツッコミを入れる事はなかった。さすがに北海道札幌市中央区南9条西12丁目に生を受けただけのことはあった。その産婦人科ではおはようからおやすみまで暮らしを演出したりしなかったりする人をかなりの割合で輩出していたというののだから、彼にもその土地の人間としての誇りというものが強くあった。人間辛抱だ。辛抱すれば花が咲くというものだ。花が咲く、はながさく、は、永作博美は今何してたっけ。イーナーネーで調べないと。彼はCMで外人がしゃべるインターネットという言葉がどうしてもイーナーネーに聞こえてしまうので、面倒くさくなってインターネットのことをイーナーネーと呼ぶ事にしている。そんなことを考えつつもそのうち師匠の回想につきあうのが面倒くさくなった彼は、とにかく西に行かなければならないことになっているんだろうと考えていたので、逆らわずにそうすることにした。

彼が西に向かうに当たって先の師匠から伝えられた事がいくつか教えられたはずだったが、何故か彼にはまったく思い出せなかった。彼はひとたび現場に着くとそれまでの行動の目的や必要にして十分な数々の技を繰り出す事ができるのだが、場所に向かう道中ではそれを思い出せないでいる事が頻繁にあったので、まあこれもいつもの事だろうと軽く考える事にした。ある時などは軽く考えすぎて目的はおろか目的地自体を忘れてしまう事もあった。そんな時はたいてい天界の師匠から声がしておまえは何をしているんじゃないかと注意が入るので事無きを得るのだが、ひどい時などは師匠がみんなのウマ倶楽部でハシッテホシーノ勝利記念コスプレをしているほしのあきの艶かしい姿態に心を奪われているので注意を与えられずそのままどうしたら行けるのか教えて欲しいくらいの国に行ってしまったたりしまわなかったりするののでしかたなくその住人として一生を終えたり終えなかったりするのので始末に困り、7回生まれ変わった後に目的を達成することもないわけではなかった。対策に困った師匠は彼をいっそのこと破門にして新しい弟子でも取ろうかと七転び八起きもとい七転八倒するのだがそうこうしているうちに時が過ぎ河は流れいつのまにかすべての問題は解決しているのが大方の予想だった。オッズは7回生まれ変わるうちの3回目で目的を思い出すが一番人気の2.8倍だった。そうしたくじはだいたいイギリスの見た事もない街角に売っているそうなのでイギリスに行った事のあるどっかの誰かに聞いて訪ねて回ったり庭ぼうきを野球のバットに見立てて振りまわしていればクリケットのメンバーに入れることももしかしてあるかもよ。さあキミも、BBCワールドでその勇姿を世界中の人に晒してみないかい？

さて、今回は師匠もいない、正確に言うとまだ死んではいないのだが今回から面倒はいっさい見ないし残された人生をお前の監視などに使うのはもったいないわいわしゃこれからほっし〜のあきちゃん（一文字加わった）とユッキーナの区別をつけに東京競馬場に行ってくるわいと大天使ミカエルとかいう者のように甘い香りを残して旅立った、という事でしっかりと2冊で100円もするメモ帳のようなノートに目的地を書きこんだおかげで忘れずに来ることが出来た彼なわけなのだったが、はて空飛ぶ天狗はどこじゃらほいと目を当たり一面に凝らしてみると、果たしてそのような姿はどこからも確認する事は出来なかった。しかたなく彼は天狗が現れるまでこの地にとどまる事を決意し、とりあえず新宿2丁目で新しくオープンしたという24時間1600円というネットルームとかいうところに陣地を置くことにした。そのネットルームにはシャワーもロッカーも備えてあり、当然新宿副都心のビル群からも近いのでそこにいち早くたどり着く事が出来る。いまどきビル群といえば新宿だろう。他に霞ヶ関にもビル群などあるであろうと思われたので、そこにほど近いところなどという選択もあるにはあったが、自分の持ち金だけを残すために日々活躍していらっしゃるエリートやんごとなき方々などを助ける義理もそうないだろうと思い取りやめる事にした。それに、新宿近くには代々木がある。代々木といえば日本が世界に誇るべき2大施設がある。日本共産党本部と国立競技場である。日本共産党がなければ派遣切りで日夜苦しんでいらっしゃる労働者の方々をJMIU等の組合活動で支援する事もあまり芳しくなくなってしまうし、そういえば筆者も何年か前に失業保険をもらうために一度助けてもらった事があるが、その後選挙があった際には組合の人を通じてぜひとも我が日本共産党に投票をお願いしたいみたいな事を言われはわかりましたと二つ返事で引き受けたのはいいのだが投票当日にそのことをレッセフェールがごとく忘れまくり普通に民主党に票を投じたわけ次第なのだが、まあそんな感じだ。もやいにでもまかせておけばいいのかもしれないが今のままではまだまだ規模が小さすぎるだろう。それに国立競技場がなければ、サッカー日本代表が東京で試合を開催したり石原プロが裕次郎何回忌みたいな事をするスペースがなくなってしまう。特に後者は極めて重大な問題で、そのことを軽視すると戦中派や団塊の世代の方々が暴動を起こしかねない危険性がある。その世代の人達を舐めてはいけない。かつては日米同盟という日本にとって少なくとも経済的には大変にありがたーいものを（と小室直樹さんが言ってたよ）アメリカ様が結んでくださるというのにこともあろうによくわからず反対して安田闘争とか中ピ連とか（時代が少し違うかもしれないが筆者にとっては

大して変わりはない) わけのわからない運動を起こして日本中を震撼させたのだから、そのような人達がいつなんどき発狂してわけのわからない運動を起こすか気が気ではない。現に今でもその萌芽は散見され、口ハスだの綾小路きみまろブームだの50代からの田舎暮らしだのわけのわからない事件が方々で頻発しているのだから、くれぐれも用心するに越したことはないわけなのであるわけだが、彼は筆者が先ほどからいろいろと書いていることなどアウトオブザ眼中とかいった感じでとりあえず先に気になっていた永作博美の近況などをgoogle検索などすることにした。

最近のネットカフェには生意気にもWindows Vistaとかいうよくわからないソフトウェア入りのものがある。PCがハイスpekならさして問題ではないらしいのだが、中にはそんなでもないスペックなのにそういったわけのわからないソフトウェアが入っているものもあって、電源を入れ立ちあげたとたんから重くてしかたがない感じになってきて、いちいちイーナ―ネーイクスプローローとかいうインターネット上のウェブサイトを開覧する際に使うソフトを起動させる時ですらしばらくの間我慢を強いられていまどき98Seかよもう2009年だぜベイベーなどとささやきながらやむなく2畳ほどの半個室で妄想を申そうなどとほざいてみたり体をくの字にしながら手を突っ張らせて後ろにややそらし手のひらを太陽にかざしてすかしてみたりみなかつたりしつつ時間を潰さなければならないのでマジやってらんないっすよ。ねえ店長?彼はそのような心配にも耐えに耐え永作博美についての検索をはじめた。今はただ耐えるのみだ。人間辛抱だ。辛抱すれば花が咲くというものだ。花が咲く、はながさく、は、永作博美は今何してたっけ。イーナ―ネーで調べないと。先ほども書いたが念のために言うと彼はCMで外人がしゃべるインターネットという言葉がどうしてもイーナ―ネーに聞こえてしまうので、面倒くさくなってインターネットのことをイーナ―ネーと呼ぶ事になっているのだ。大事な事なので、2度言いましたよ。さて彼がイーナ―ネーで調べると、大した事は書いてなく、普通になんかのドラマに出ていたりCMに出ていたりしたので、そのまま彼は興味をなくし、リクライニングを倒すと急速に意識を失った。

と、彼の元へ、東京競馬場へ向かっているはずの師匠が現れた。あれ師匠どうしたのですかほっし〜のあっき〜な(3文字増えた)ちゃんはどうぞでしたかと彼が訊ねてみると、

——ああ、ほっし〜のあっき〜な☆(また1文字増えた)ちゃんか、くっそお、皇成のやろう、このわしを差し置いて刺しつ刺されつのお付き合いなどしおってえ、ヨータや、もしかしておまえが引き合わせたのではあるまいな? そんなわけはないか、まあいい話を戻そう。わしはな、確かに府中にあるJRA中央競馬何とか会東京競馬場へ行ったのじゃ。そして人もごったかえす中、今までに培ったあらゆる修行で身につけたチョンリガン、もとい千里眼であの背ばかり高くて競馬中継の司会をやるにふさわしいまさに馬のような顔をしているだけの男、川合俊一と一緒に真面目に仕事に取り組んでいるあの純粋でかわゆ〜いほっし〜のあっき〜な一☆(さらに1文字増えた)ちゃんを見つけたのじゃ。あっき一な一☆(1文字変わった)ちゃんは確かに20代後半から胸が大きくなってこんな年齢になっても胸が成長するんだあなどどこかのテレビ番組で意味のわからんことをいうこともあるだろう。わざわざ言わなくともいいことを公共の電波を使って言い、かえって世間の疑惑の目を呼び覚ましたりするようなおちゃめなところはある。しかしだ、わしはそのようなことなど露ほども気にしてはおらぬ。問題はだな、ユッキーナ、もといあっき一な一☆(また1文字変わった)ちゃんがいつわしの髭の魔力のとりこになるのかということじゃ。どうも同じ番組に出ているので口に出すとついゆっき一な一(カタカナに変換するのが面倒になった)と間違ってしまうわい。わしは死力を尽くして彼女(いちいち文字を変えるのが面倒くさくなった)に、悪いとは知りつつ違法なストーカー行為などを行い、いつ彼女がわしのことを受け入れてくれるのかを探ったのじゃ。場合によってはやむを得ず人心操作の秘術も使わなければならぬと覚悟した。弟子を持つものとして、そのような卑怯な手段を用いるなどもってのほかなのはわかっておる。しかしだ、しかし、この老境の身の一途な思い、そこいらの若者に負けることなど決して有り得ん。神をも恐れぬ背徳的なことだとわかつ

てはおっても、時にはしかたのないこともあるのじゃ……ヨータよ、この熱く滾らんほどのせつない思い、お前のような若輩者には、いくら言ってもわからんじやろうなあ。ああ、あああ、あああああああああああああああー

そこで目が覚めた。悪夢のせいで彼の身体から大量の汗やら赤いものやら黄色いものやらがあたり一面に広がっていた。彼は数千年の修行で身につけた秘術を口に宿し一瞬で部屋をきれいにしてから、違う秘術で状況を確認することにした。彼の身から秘術が口に宿されると、天井に上空から見た東京近郊図が展開される。何事もないことがはっきりわかった。彼はこれからどれほど待ちつづければいいのかを考えた。考えた。考えた。結局よくわからなかったので師匠に電話する事にした。先ほどの悪夢のせいで、師匠とは言えあまり話したい気分ではなかったのだが、自分のこれからの身がかかっているのならばそれはやむを得ないことだった。彼は秘術を口にすると中空から黒電話を取り出し、いちいち一つずつ番号を回した。本当はケータイなど使ってもみたいのだが、それをするとか何故か師匠にわかってしまい、3日3晩お母さんが手作りしてくれたおやつが食べられないとかしたたかに水の入ったアルマイトのバケツを持って一日中廊下に立ってはいけなくなってしまいいったいぜんたいこんなことまったくアルマイトなどとぼやかなくてはならないなどよくわからない罰ゲームを与えられることもまれではなかった。ましてテレパシーなどといういかにもハイカラなものでも使ったらもう大変である。そんな教えもせぬものなど使いおって貴様はわしの心を読む気なのかこのごんたくれがと言われアイドリング！！のメンバーのうちもっともアイドルらしからぬ谷澤恵里香（滝口ミラがよかったのだがメンバーに残ってほしかったのだが昔の堀ちえみに似ている気がするのだが）らとともにローソンの制服を着て全国キャンペーンなどしなければならなくなってそれはもう面倒くさい事この上ないので、いずれにしてもやむをえないことだった。一回では出なかったので、都合32回ほどいちいちダイヤルを回して師匠が電話に出てくれるのを急じたが、一向に電話がつながる気配はなかった。彼は電話をあきらめ秘術を口に宿して黒電話を中空に引っ込めると、ヒマつぶしにイーナーネーで遊ぶことにした。先ほども書いたが念のために言うと彼はCMで外人がしゃべるインターネットという言葉がどうしてもイーナーネーに聞こえてしまうので、面倒くさくなってインターネットのことをイーナーネーと呼ぶことにしているのだ。大事なことなので3度も言いましたよ。

イーナーネーには下手をすると人生を左右しかねないほどのさまざまな情報が無数にあり、それは数千年に渡って修行を重ねた彼であっても大変に魅力的な事だった。この波に乗り遅れる事はすなわち自らを情報弱者への道へ誘うことを意味するのだ。よく考えれば秘術を使わなければ出来ない事も彼が修行を始めた時ならいくらでもあったが、この科学万能主義の世の中では（ドラえもんなどの藤子F作品のセリフによく出てくる言葉だが別にヒョンヒョロでもかまわないが海の王子ではたぶん出てこないと思われるが魔太郎が来る！ではまず出てこないと思われるがちなみに藤子Aは銀座組だそうで赤塚不二夫のような年を取ったら遊びを引退するような新宿組と違っていつまでも丈夫なのだそうだが赤塚の著書によると赤塚がそのように大変うらやましがってたそうだが）もはや秘術など使わずとも出来る事がいくらかもあったので、今までに修行を重ねてきたことが彼にとっては、ほんの一瞬だけではあったが、なんだかむなしくも思われた。だがいくら修行を重ねてきたからといって過ぎ去った時間は帰っては来ないので、無駄に長生きしただけだ大した事はないと現実逃避する事にして気持ちを切り替え、当座の楽しみに没頭する事にした。彼は度重なる修行の成果で、肉体そのものは20代の若者と変わらなかった。なのでその分性欲も人並み、いやそれ以上あった。彼がPCを駆使して楽しみを求める先は、もちろん魔法の言葉、無料動画、である。世の男性諸君が、PCスキルがあがった要因でダントツの1位に輝くのも頷けるほど（2008年度デジヨブラボラトリー刊世界まるごとどうでもいい知らなくてもいい知ったら損する情報調査年鑑による）、無料動画という言葉はもはや魔法の言葉以上のものがあった。同じような魔法の言葉に出会

い系サイトというものもあるが、この場合サクラやネカマもしくは完全無料とは本当に完全無料なのか返信メールには変な料金がかかるのではないかしかも金を払ったら払ったで妙なメールだけが滝のように流れ来てうら若き、まあ別に場合によってはうら若くなくとも我慢しないでもないがむしろ大歓迎なのだが、女子がきちんと待ち合わせ場所にわざわざ来てくださるのか等あらゆる艱難辛苦を乗り越えなければならずそのうちのすごい幸運でもなければそのようなめくるめくパラダイスジャングルに辿りつけないのではないかといういろいろと余計な心配をしなければならないので面倒くさくなるのが通常である。ごく一部は通常でもなんでもなくちゃんと妙齡にして見目麗しい女子の方々に出会えるのかもしれないが、もしそういうの知ってたら、誰か親切に教えろこのイケメンモテモテクソ野郎どもが！（くれぐれも本気にしないように）

さて、彼は無料動画を探すべく、2ちゃんねるのP i n kちゃんねるなどで調べた結果海外の大手エロ動画サービスサイトのY o u r F i l e H o s tにアクセスしたが、動画が膨大にある上、英語で書かれているので何をどうやってどうすればいいのか皆目見当がつかなかった。やむなく彼は最初から英語を勉強する事にした。筆者が若い頃は洋物のポルノ小説などというものを読みたいがために英語を勉強する（低劣な頭脳しか持たざるを得ない私には気が遠くなる一方です）などという本が二見書房だったかフランス書院だったか（めんどいのでぐぐらずに書くがまあ系統が似たような出版社なのでさして問題はないだろうに決まってるそうだとそれはいこう反論は聞きません聞きたくないあーいやだ）から出ていたものだったが、まさか数千年の修行を経てこんな事をするなんてまったくもってオシャカさまでも気がつくめえ、などと思いつつ、彼は秘術を口にした。たちまち幾千もの英語学習に関する書籍が中空に現れる。それを彼は、宮崎哲哉が虚空蔵菩薩法を駆使するがごとく次々と読破し、数分後には英語のすべてが理解できるようになった。マスターした知識は常人では計り知れないほど膨大で凄すぎるのでここで紹介する事が出来ないのが残念だがまあそういう設定にしてくださいお願いしますこの通りです。次に彼はY o u r F i l e H o s tに書かれている文章をじっくり読み、どこに目指す無料動画があるのかを探したが、このサイトを見るだけでは目的の、例えば彼は好きではないがサドマゾプレイ（かつてレモンピールという雑誌で一世を風靡した今は単なる一エロ漫画出版社の久保書店発行サスペンス・マガジン系プレイなどといっても差し支えないだろうそういえば小妻要さんとかそのころから書いていた気がした絵描きさんが意外と息が長くて健在だったりするからいまさら驚いたりするまだ描いてたっけあの人あいかわらずめんどいのでまたしてもぐぐらないが）などばかり取り出して楽しむとかそんなような頭の中ではイメージがなんとなく浮かんではいるのだが言葉にしようかかと思うとなかなか出てこないまるで作家志望のあなたが思う作家とはいったい何ですかきちんと定義してくださいみたいな面倒くさいことを言われるがごとく眼前に提示しなければならない問題群として眼前に提示されてきたのでやむなく彼はイーナーネーの検索サイトで検索すなわちズバリようするにぐぐることにした。先ほども書いたがしつこいようだが念のために言うと彼はCMで外人がしゃべるインターネットという言葉がどうしてもイーナーネーに聞こえてしまうので、面倒くさくなってインターネットのことをイーナーネーと呼ぶことにしているのだ。大事なことなので、4度も言いましたよ。4度目ですよ、4度目。すると、とある悪名高い某大手掲示板つまり2ちゃんねるの中にあるP i n kちゃんねるというところの半角文字列板とかいうところにY o u r F i l e H o s tについてのスレッドがいくつかあることを発見した。そこで彼は秘術を口にすると、たちまちのうちにスレッドの全内容を把握した。さすがに魔法の言葉である無料動画の力は、数千年の修行を経た者をもたちまちのうちに翻弄する。今ここでこんなものを奇特にも読んでくださっている輕妙にして華麗なる日本の女子諸君も、一度でいいので、幼戯にふけてばかりの愚かなる男子諸君のうちの一人の耳にそっと、この魔法の言葉を囁いてみてほしい。たちまちのうちに彼の心は千々に乱れ彼の身体の体温は急速に上がりやがて沸騰して爆発、大空（おおぞらと書いてソラと読む）のかなたへと消える事必定である。なあにこの男

子余りの時代、愚かにして野蛮なる男子の一人や二人消えても屁でもないので、ぜひ一度お試しあれ。

すっかりYourFileHostの魔力にしてやられた彼は数時間ほどで数千年の修行に耐え抜いた肉体を消耗しきっていた。あたりには粘着的にして異様な蜃気楼的匂いを発する白い物体が山のごとく堆く積み上げられていた。秘術を口にすることも極めてタイギ（知る限りだが北海道札幌の一部ではつまり私の父親が使っているのだが面倒なことを何故かタイギとか言う用例は「こんな雪かきはまったくタイギだ」本当はもっと広い地域で使われているのかもしれないがあいかわらずにあいかわらずなのでやはりぐぐらずに書く）であった。しばらく放っといっているとそのうちネットルームに勤めているらしき紺のそれっぽい制服を着た若者が彼のいるパーテーションのドアにノックをしてきた。

「もしもし」

「はい、なんすか」

「申し訳ございません、他のお客様から、そちら様の方から生臭い匂いが強くすることだそうですので、料金もだいぶ御延長なさってますし、一回お部屋の方、開けさせていただいてよろしいでしょうか」

やむを得なかったので、彼はまるで自室でおもにマドラーを使う尿道オナニーに耽っていたところへ母親にドアを開けられたような気持ちになりつつ、疲れきった身体にムチを打ち秘術を口にした。たちまち堆く積もった白くやっかいなものが一瞬にして消える。

「どうぞ」

彼の一言で店員によってドアが開けられた。店員は生臭い匂いの原因物質がまるでないことに不審な表情をしたが、気を取りなおし業務連絡を始めた。

「……生臭い匂いは、しないですね」

「そのお客様の鼻が変だったんじゃないですか」

「どうもそのようですねえ……では、ただいまお客様の滞在時間が12時間を越えていますので、お会計の方一回清算させていただきます。フロントの方へ来ていただけますでしょうか」

「はい」

彼は非常に疲れていたがそのことについてははっきりいって彼に全責任があるが、これからもここを定宿にする予定なのでささいなことで逆らうわけにもいかない。素直に従う事にした。せっかくの楽しみであるイーナーネーから一瞬でも離れることは非常に辛いものであったが大人の事情なので仕方がなかった。大人になるということは辛いものである。出来るならばいつまでも子供のままでいて親の金で飯を食い親だけを働かせて自分だけが楽をして好き勝手なことをしたいものであるが残念な事に世の中のしくみはそうっていないので全国の小中高生のみなさんくれぐれも注意してくださいいつまでもあると思うな親と金はけだし名言である。ちなみに彼はCMで外人がしゃべるインターネットという言葉がどうしてもイーナーネーに聞こえてしまうので、面倒くさくなってインターネットのことをイーナーネーと呼ぶことにしているのだ。もうみのもんたも飽きたので何度目とかはもう書かないことにする。

清算を秘術で済ませた彼はとりあえず数週間分の滞在費も同時に支払うと、腹が減ったことに気がついたのでとりあえず外に出ることにした。もちろんネットルームでも注文すればそれなりの品は出てくるが、この後の無料動画との対決のためには、何がしかの精力をつけておく必要性にかられたのだった。イーナーネーをしているとそのことに夢中になりすぎて腹が減るのも忘れるろいうことはよくある話だと思うが、しばらく呆けていたせいもあって彼の身体はなんらかの栄養物質を欲していた。外に出るとなにやら淫媚な視線を強く発する男子のような方々が幾人かいたのでマジシカトして伊勢丹方面を進んだが、適当な食堂が見当たらなかったのが結局吉野家に入った。彼は大盛ねぎだくを注文すると数秒で平らげまた同じものを注文した。また数秒で平らげると同じものを注文した。また数秒で平らげると同じものを注文した。また数秒で平ら

げると同じものを注文した。さすがに6杯も平らげるとこれはいっそのこと食べ放題にでも行った方が得だしいろんなものが食べられるしそっちの方がよかったかなどということを一瞬思ったが、一人で行く食べ放題はどこかむなしくそしていじましい感じが彼にはした。彼は以前どこかで適当に捕まえた彼女と一緒に新宿にあるブルマーレという洋食系の食べ放題に行った事があるのだが、そのとき一人きりで延々いちごばかりしつこく食べている30代くらいの女子をがいたのだ。テーブルにぽつんといちごだけが乗っかっている大皿だけを置いている姿が、いかにも異様でよく目立ったのだ。しかもうっかりいちごを口いっぱい頬張る彼女とバッチリ目があつたからたまらない。いたたまれなくなった彼は必死に彼女の方を向きなんとかその女子の注目をかわそうとしたものだった。そのことを思うと、一人で絶対に食べ放題など行かない、行きたくない、行ってたまるかという気持ちが強く起こるのを禁じえなかった。まあ筆者は得であればいいので一人でも平気で食べ放題に行くのだが、トシを取ってもう食べられなくなったのでそれが非常に悔しい限りである。若い頃に戻りたいとか思わないが、もしたくさん食べられる身体になれるならぜひとも若い頃に戻りたいものである。そして韓国留学でもしてトゥセヨトゥセヨと下宿のおかみに死ぬほど料理を出してもらいたいものである。韓国ではたくさん食べるほどえらいみたいな風潮があると本で読んだ事があるのだが、筆者もなぜかそれを信じている。たくさん食べないやつはきっと食べてる時間や食べ物の消化の時間などをリストラクチャリングしてなにか得体の知れない悪だくみを企んでいるにちがいないのである。たくさん食べて頭に血が回らないくらいになれば悪い事など考えないのである、と勝手に思っている。そうだそうに違いないそのとおり。ということで彼はたくさん食べて胃がすっかり重くなったのでとりあえず菓子をもとい河岸を変えその辺の適当な飲み屋へ入った。

注文をとりあえずビールですませると彼はしばしばうっとした。そしてふと天井付近にあるテレビを見た。何かのニュースが流れていた。見ると天狗のお面である。空飛ぶ天狗が現れたのである。彼は場所を知るべくアナウンサーの発する音声を一字一句聞き漏らさぬように努めた。場所は新宿から離れた六本木の、ヒルズやらなんとかビルやらのビル群が林立する、2009年に入ってもバブルを忘れない貴重な地域であった。彼は一瞬秘術を使って瞬間移動しようかと考えたが、疲れていたし地域が地域なので腹立たしい人間しかいないだろうから急いで助ける義理もないだろうと踏み取りやめる事にした。空飛ぶ天狗の放つ光線はなかなか美しく、光線のひ弱い光が乱反射するさまが夕焼けのごときグラデーションを思わせた。当たり前のように人もいくらか犠牲になっているようだった。彼はあとでネットルームに帰ったら、この事件のことを、もう一回無料動画をたっぷり楽しんだ後、イーナーネーの大手ポータルサイトであるヤフーでゆっくり調べようと思った。ちなみに彼はCMで外人がしゃべるインターネットという言葉がどうしてもイーナーネーに聞こえてしまうので、面倒くさくなってインターネットのことをイーナーネーと呼ぶことにしているのだ。

同じお題を用いた小説、Twitter 小説のご紹介

今回も、てきすとぼい杯の連動企画をしゃんさんが開催してくださいました。

漢字三題「陰、否、親」をお題に、第6回てきすとぼい杯参加作品の姉妹編のような2作品が投稿されています。

勝手に連動 第6回ぼい杯スピンオフ賞

<http://text-poi.net/vote/22/>

また今回、お題の「緩、応、子」及びスピンオフ賞のお題「陰、否、親」を取り入れた Twitter 小説を書いてくださった方がいらしたので、Togetter にまとめページを作成いたしました。

第6回てきすとぼい杯のお題で **Twitter** 小説

<http://togetter.com/li/522981>

よろしければ、これらの作品もあわせてお楽しみください。

※他にもございましたらリンク追加いたしますので、見かけた方はご連絡くださいませ。

終わりに

第6回てきすとぼい杯、お題は漢字三題「緩、応、子」とさせていただいたのですが、投稿の際には「お題が幅広くて書きづらい」「今回は不調」などの声が多く聞こえた一方で、集まった作品は大半が☆3点台後半以上の高得票、感想等でも好評、という、大変に不思議な結果の回となりました。

そろそろお馴染みとも言える作者の皆さまの作品が光ったと同時に、時代小説、スポ根、実験的文章など、新風を吹き込んでくださるかたもいて、非常に読みごたえのある作品の結集した回となった気がしています。

また、感想チャット会へも、おそらくこれまでに最大人数の作者さまにご参加いただきまして、多くの感想に加え、作者ご本人による執筆裏話などを聞く機会が持てるのは、やはりWEB小説ならではの良さなのではないか、と感じております。

今回は〈途中非公開〉ということで、審査期間終了までの間に、票の途中経過が公開されない仕組み（※期間中は投票人数のみ表示されていました）を試させていただきましたが、いかがでしたでしょうか。

票の途中経過につきましては、公開／非公開とも、それぞれ長所と短所のある印象があり、てきすとぼい杯が試験企画となる形で、少しずつより良い投票形式を模索していくことができればと考えております。てきすとぼいのサイトの仕組みにつきましても、お気付きの事などありましたら、どうか遠慮なくご意見くださいませ。

――最後になりますが、今回も本当に力のこもった、魅力的な作品を数多くお寄せくださいまして、まことにありがとうございました！

そして今回もまた、連動スピンオフ賞を開催して下さったしゃんさんに、この場を借りてお礼申し上げます。

てきすとぼい杯も、これでようやく第6回を数えまして、半年の山を超えることができました。

引き続き、来月以降も毎月定期開催のつもりで準備しております。

お時間ございましたらまたぜひ、投稿、審査・感想にご参加くださいませ。

2013 年 7 月 12 日
てきすとぼい杯 運営担当

※なお、次回てきすとぼい杯は、2013 年 7 月 20 日（土）開催の予定であります。



作品集電子書籍を
Pubooにて頒布中。

言葉の茂る 樹が育つ。



てきすとぽいは、競作や共作を支援する
テキスト創作サイトです。一人ひとりのウエブ
作家たちが、競作・共作を通じて結びつき、
感想やアドバイスを、採点などをかわしながら、
よりよい作品を創ることを目指しています。
作家同士が言葉を交わしあい、言葉のやり
とりが豊かに茂り広がっていく。そんなサイ
トにあなたも参加して、一緒に創っていきま
せんか？
いまはまだ、小さく芽吹いたばかりですが、
いつかきつと言葉の大樹になると信じて。

てきすとぽい杯作品集
〈第6回〉

<http://p.booklog.jp/book/74328>

編集まとめ : てきすとぽい

<http://text-poi.net/>

てきすとぽいプロフィール

<http://p.booklog.jp/users/textpoi/profile>

表紙デザイン : 蟹川森子

てきすとぽい杯コピー : 茶屋休石

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74328>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74328>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー

<http://p.booklog.jp/>

運営会社 : 株式会社ブックログ



てきすとばい杯